NPO法人

JSRC

2009年 9月 1日

第３号

Jomon Shiba

特定非営利活動法人

縄文柴犬研究センター

NPO法人 JSRC

Jomon Shiba

第 3号

もくじ

もくじ …… 1

「戦争をしない」国是と犬の生涯 ☆JSRC理事長・新美治一(名古屋経済大学法学部・大学院法学研究科教員) … 2

シバの散歩道(3) ☆JSRC理事・根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家) …… 4

お便りコーナー ☆肥田さん　☆中山さん　☆金さん …… 7
☆佐藤さん　☆桒原さん　☆竹村さん　☆息子・竹村祐太郎さん …… 9
☆橘 喜代子:映花さん …… 10

思い出の犬たちー4ー ☆柴犬研究所・五味 …… 11

室内犬から屋外犬へ ☆宮城県・阿部伸樹 …… 14

特別寄稿 ニホンオオカミの毛質と毛色について ☆北群馬渋川郷土館・小山 宏 …… 16

縄文柴犬の見方ー3 体軀・胸や四肢について(その2) ☆五味靖嘉 …… 18

お知らせ **縄文柴犬研究センター交流会** ☆JSRC北海道・東北支部長・橘 宏 …… 22
会場:岩手県立花巻農業高校 •講演会:根深誠「人と動物のかかわり」準備中
4/1以降の会計報告 …… 22
ー再録ー理事会開催のお知らせ ☆JSRC理事長・新美治一 …… 3
諸料金一覧・血統登録について …… 21

JoeとMon 第2話-朝の騒動(4コママンガ) ☆作:ぽよよ～んオヤジ、文:風(フウ) …… 裏表紙・内裏

広告掲載:「吉方内科医院」、「秋田清酒株式会社」 …… 表紙・裏側
:「秘境ヒマラヤ産(冬虫夏草)」 …… 6
:「サン獣医科」 …… 21

宛て名表記の確認をお願いします。

特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター

会事務所　**郵便振替口座** 02280-2-106951
〒 014-0073 **秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5**　TEL 0187-68-2976
http://www.sibainu-k.jp　jsrc.jimukyoku@gmail.com

「戦争をしない」国是と犬の生涯

縄文柴犬研究センター 理事長　新 美 治 一
(名古屋経済大学法学部・大学院法学研究科教員)

戦争があれば、人の命以上に犬のいのちは憐れである。20世紀の戦争は、犬のいのちにとっても、大きな試練であった筈である。この問題について、小生は、研究したことはない。また、資料を収集した訳でもない。このような状況であるので、本来は、発言権がないのであるが、気になっていることを、少々書かせて頂く。

それが何時のことだったか正確な記憶はない。モスクワ留学時代に当時のカリーニン大通りに面した大きな映画館で、第2次世界大戦のさなか、対ドイツ戦線でのソヴィエト・パルチザンの英雄物語を観賞したときのことである。その映画の1シーンをどうしても忘れることができない。ドイツ軍の相当数のジャーマン・シェパードが、脱走に成功したパルチザン兵を追いかけるのである。この酷いシーンがはやく終ってくれ!無事に逃げ切ってくれ!と祈りにも似た気持でいたことは確かである。しかし、犬に追い詰められたパルチザンは、犬に先導されたドイツ兵に射殺されるまでの幾ばくかの時間、最悪の拷問を受けていたのである。このときほど、犬が憎いと思ったことはない。蛇足でいえば、映画から受けたショックで、それ以来シェパードはだめである。

しかし、冷静に考えてみれば、ドイツ軍にとって、このシェパードは、頼りがいのある重要な戦力である。戦力に仕立て上げたのは、ドイツ軍である。この映画では、パルチザンの英雄的な魂を描くことにあったので、この犬やその他の軍用犬の運命については、もちろん触れていない。軍用犬が軍でどのような扱いを受けていたかは想像するだけであるが、無償で徴用できる一般の兵卒よりは、大切に遇されたであろう。仮にそうであったとしても、戦争を有利に進めるための「すて駒」であったことに間違いない。

戦時中、小生の家には、紀州犬(耳の先端だけが茶で、体毛は白)がいた。私の生まれる前から、昭和19年の春頃までのことである。祖父が亡くなる少しまえに、兵隊<さん>がやってきて、<それでは・・・>といって、連れて行ってしまった。幼い頃の記憶でも、ポチの悲しげな声がとても憐れであったことを覚えている。それ以前から、周りの隣近所からは、<治平(祖父の名)さんとこは、余裕があるんだねー。>と言われ、犬を飼っていること自体が、悪いことのように噂されていた。ポチは、戦争で殺されたのである。蛇足でいえば、小学校3年生頃から大学に入学する頃まで、我が家には、ポチそっくりの紀州犬が一緒に生活していた。この犬は、家族に見守られながら天寿を全うし、手厚く埋葬された。

第2次世界大戦では、父方の叔父と母方の叔父が、戦死している。私は、いまでも、この2人を「いぬころ」のように使い捨てた、天皇と天皇制に深い怒りを持っている。それでも、人間は、徹底した天皇崇拝教育・オカルト的な教育を受け、「天皇陛下のため・・・」「御国のため・・・」との錦のみ旗のもとで、自分を納得させ戦地に赴いたのである。哀れではあるが、かの時代を生き抜くには、他に道はなかったのである。

戦争で利用される犬と、戦争のさなかであるとの理由で「殺される犬」とがいた。戦争との係りで、犬を私から切り離すことはできない。

小生は、「戦争はしない」・「戦争遂行に係る武器は、これを製造はしない。国としてこれを保持することもしない」・「国際法で主権国家に認められている<交戦権>も、これを行使しない」という国是を、可能な限り多くの人が学び、この国是を守り、「実現」するために参加して欲しいと願い、教室で学生と向かいあい、町での「9条を守る会」の行事があれば率先して講師を引き受けている。直接に、上記の「犬の記憶」が影響しているわけではない。でも、皆無ではない。

戦争は、国が公然と「殺人」を扇動し、実践する行為である。殺人犯1人を、警察が一般的な時効の成立までの15年のあいだ追いかける行為は、「人の命の大切」が社会

的に認知され、国が法規範にしているからである。その国が、何百万という大量殺戮を組織し率先して行うのが戦争である。戦争は、人の尊厳を踏みにじるもっとも卑しい行為である。「相手国の人を人間と思うな！自分を人間と思うな！」と、人間であることの最低限のモラルをも投げ捨てることを強制するのが戦争である。国の富(国民の税金)で再生産には決して組み入れることのできない武器を大量に生産し、消費するのが戦争である。

20世紀、戦争は、その規模と性格を3度変えている。第1次世界大戦は、史上初めて大量破壊兵器が登場し、無差別殺人を企てた戦争である。第2次世界大戦とそれに続く幾つかの戦争は、国際戦時法で犯罪とされている民間人の殺傷を核兵器まで用いて実行した戦争である。アメリカが企て、20世紀末からはじまり現在も継続している戦争は、コンピューターを駆使し、「人の死」をゲーム感覚で行うことのできる戦争である。もちろんこれには、アメリカ側からみれば、という限定を付さなければならない。とは、いえ、「人の死」に厳粛に向き合うなどと言うことは、戦争「屋」には無縁なことである。

「平和である」ことによって、人は人を慈しむことができる。人は、犬とまともな形で共生できる。しかし、いつまでも「平和である」ことが保障されているわけではない。「国には戦争をさせない、私たちは戦争をしない」、このことをあらゆる機会に、主権者である私たちは、主張し、どんな小さな「兆候」でも見すごすことはしない行動が求められる。「国益」とか「国際貢献」とか、「アメリカにおんぶに抱っこで、何もしないでいいのか」とか、・・・どんな大義名分や泣落としにも負けない心構えが求められる。いま、身近に、主人を信頼しきっている「リン」やリンにつながる将来の犬たちが「天寿をまっとうできる」ことを保障するためにも、「憲法9条を守る会」がある、と思う。

(2009.07.31)

ｺﾝﾃ・八ヶ岳

シバの散歩道(3)

根深　誠（文筆家･釣り師･元登山家）

二男が小学六年のときコロがわが家で飼育されるようになったのだが、いま思えば二男は、野良犬だった幼犬のコロと知り合ったころから飼育を決意していたふしがある。犬を飼いたいと言い出したとき、コロと知り合ったことを私は知らなかったから、そうか、そのうち適当な犬を貰ってこようと内心思った。

間もなくしてネパールへ行った私が、友人にその話をすると、友人は「猶子の契り」、すなわち義兄弟の関係にあるムスタン藩王家にチベット犬ラサアプソがいるので、仔犬が生まれたらもらってあげましょうと頼もしい返事をしてくれた。友人の曾祖父は明治時代のことだが、日本人として最初にヒマラヤを探訪してチベットに潜入した禅僧河口慧海を遇している。河口慧海は彼の家で旅装を解き、ムスタンに入った。

ムスタン藩王国が外国人に門戸を開いた年の翌一九九二年、私は雑誌の仕事で友人とともにウマに乗ってムスタンを旅し、藩王の歓待をうけたのだが、それは友人がいたからだった。その後、友人がリンゴの研修で弘前に三ヶ月間滞在したとき私が身元引受人になったことがある、という間柄なのである。

その友人がラサアプソを貰ってくれるというのだから、これほどうれしい話はない。私は大人気もなく喜び勇んでカトマンズから家に電話を入れた。しかし、すでにそのとき、つまり私の留守中にコロはわが家にきていたのだ。私は少しがっかりした。

コロは二男に拾われて育てられ、先述したように二男の腕の中で息を引き取ったのだから幸せな一生だったと思う。

コロの突然の死は、わが家にとって涙を隠し切れないほどのかなりショッキングな出来事であり、それだけに、もうこりごりだ、ごめん被りたいとの心境だった。ところが、それから二年ほどしてシバがわが家にきたのは、シバの生家の石場家当主とは、おいそれとは断わり切れない間柄でもあり、その一方で、わが家に育てて貰いたいという相手の気持ちも、貰われていくシバへの親心のようなもので私には容易に察しがつくのである。日本人の平均寿命から私の年齢を差し引いた余命と考え合わせて、まぁ、似たような寿命だろうからともに生きてみようとの思いで引き受けたのだった。

私が引き受けたのだから、私が散歩係になるのもやむをえない。コロを拾ってきた二男と似たような立場である。

以上述べたようなことが、コロの飼育からはじまってシバがわが家で過ごすことになる、この二十年ほどの経緯である。朝夕のシバとの散歩でさまざまな出来事に遭遇し、いろいろなことを考えさせられるきっかけになっている。ときには根ぐされしたような地域社会の実態が浮かび上がってきたりする。これからもいろいろなことがあるのだろうが、身近な自然に親しみ、人間として本来あるべき心のあり方や、その心が正当に反映されるようなよりよい社会の実現を願い、良くも悪くも、その参考になるような出来事をスケッチふうに紹介したいと思う。シバの散歩が主軸なので、この稿から表題を「シバの散歩道」と改めたい。

※　　※　　※

ノスリがカラスに追いかけられていた。本来ならカラスより大きいはずのノスリだが、そのノスリはカラスより小さく、どことなくやせ細っていた。栄養不足なのかもしれない。十㍍と離れていない至近距離を低空で孤を描きながら逃げ回る。くりくりっとしたつぶらな瞳までが見えた。まだあどけなく可愛らしいノスリの表情に比べると、カラスは体全体が黒々としてくちばしが太く、しかも口を開けて飛んでいたのだから、いかにも獰猛に見える。住宅地でゴミを漁るハシブトガラスだ。それだけに野生の餌に依存して生きるノスリよりは栄養が行き届いているのか、威勢がいい。飛びながら、ぎゃーぎゃー騒ぎ立てて仲間を呼んでいる。遠くから１羽、仲間のカラスがあらわれ、ちかくの電柱にとまった。

カルガモの親子。ヒナが五羽。

ノスリが田んぼのわきのスギ木立に逃げ込むと、さきほどから追い続けていたカラスも追跡の手を緩めることなく、ノスリがとまった枝のすぐわきの枝にとまり、ぎゃーぎゃー啼き喚く。ノスリが飛び立つとすぐにまた追いかける。どういうわけか、ノスリよりもカラスのほうが速いのだ。カラスはノスリに追いつくとその上方に回り、飛びながら足を突き出し、ノスリの背に爪を立てて威嚇する。ノスリはそのつど反転し、飛行の向きを換えてカラスの攻撃を交わす。

そこへ電柱にとまっていた仲間のカラスも加勢し、2羽でノスリを追いかけた。ノスリは必死で逃げ回り、追われるがまま視界から消え去った。私はこのときの様子を飼い犬のシバと散歩しながら観察したのだった。ノスリがカラスに襲撃されているのを見たのは、このときだけではない。ノスリはいつもカラスに寄ってたかって襲撃されている。というより散歩中、たびたびそうした光景が目撃されるのだ。

私はそのときどきの天候や気分しだいで散歩コースを変えることもあるが、たいていの場合、弘前市内を流れる土淵川沿いの「サイクリングロード」と呼ばれる遊歩道を利用している。私の住居から近くて田園風景がひらけ、散歩には適した場所である。ただし川が汚れて三面護岸されているのが「玉に瑕」。「玉磨かざれば光なし」の喩えにもあるように、磨いて自然を蘇生させれば、散歩もまた輝きを増し、愉しいものになりそうな気がする。

私以外にも何人かの散歩中の人たちがいたなかで、誰一人として、ノスリとカラスの攻防に気づかずにいた。というより、無関心であることに私は考えさせられた。同じように散歩していても私とは眼差しを向ける方向がきっと違うのである。季節の変化や周囲の動きに興味がないのだろうか。前方一点を見据えて、両手を大きく振り、小学校の運動会やオリンピックの入場行進を連想させるような歩き方をしている中高年の男女がいる。かと思えば、サイクリングしたりジョギングしたり、さまざまなかたちでサイクリングロードは利用されている。自転車か徒歩でしか利用できないのだから、クルマの運転免許のない私には打ってつけのフィールドだ。

サイクリングロードは幅三㍍ほどだろうか、アスファルトで舗装されている。ときおり、その路面でヘビを見かけることがある。アオダイショウ、シマヘビ、マムシ、ヤマカガシ。私はヘビが嫌いなので一瞬、緊張感が走る。ヤマカガシは死亡例もあるほどの毒ヘビだ。マムシの場合、噛まれた箇所が腫れ上がっても死亡例はないそうだ。

※ ※ ※

さわやかに薫風が吹き渡る昼下り、久渡寺まで足をのばした。サイクリングロードを土淵川の上流へ5キロほどの距離にある。久渡寺へ行くのは今年、これが

田植えが終わり、リンゴの花咲くころのサイクリングロード。背後は新緑の久渡寺山。

二回目。ひと月ほど前、道端のところどころに、まだいくらか残雪が見られるころ、シバと出かけたことがある。しかし今回はアスファルト舗装の照り返しがきついだろうと思って、シバは連れていかなかった。

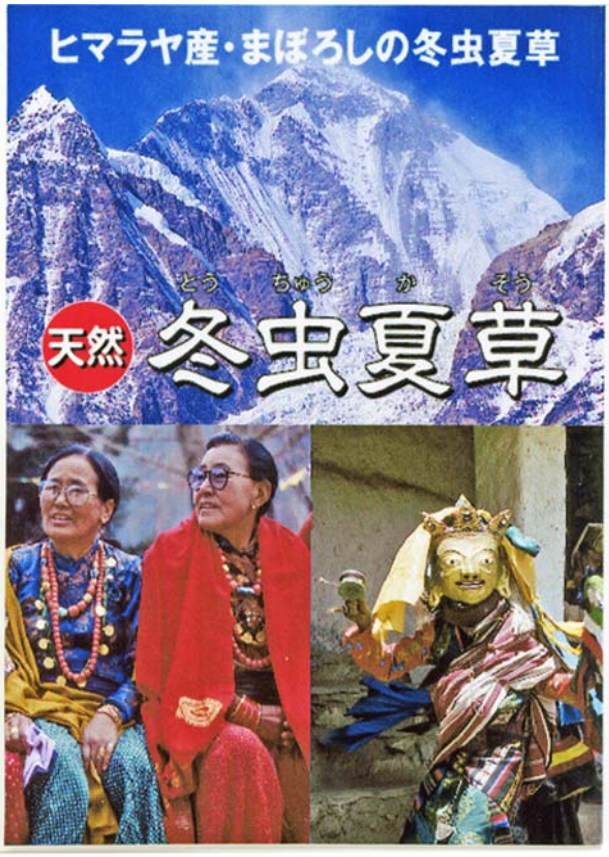
途中の田んぼではところどころ水が引かれ、そこにカルガモが数羽浮かび、ときおり頭を突っ込んで餌をついばんでいる。いまが盛りと咲き乱れるリンゴ畑では、摘花作業に追われる爺さん婆さんの姿があちこちに見える。若者は一人もいない。ツバメが啼きながら飛び交っている。繁殖のため、東南アジアの国々からやってきたのだ。カエルの声も聞こえてくる。道端の土手の斜面や田んぼの畦道に草花が咲き乱れている。その中で、菜の花の黄色が日の光を跳ね返し、ひときわ鮮やかに目につく。

自然が生気横溢し、目に映るさまざまな事象が生き生きと輝く季節だ。天候次第ではそろそろヘビも姿を現すころだろう。サクラが散り、リンゴの蕾がほころびはじめた。田起しもはじまった。耕運機が巻き起こした土塊にカラスがやってきてミミズをついばむ姿が見える。ハクセキレイも尾を上下に振りながら、なにやら餌をついばんでいる。久渡寺山の残雪も消えて、黄緑色にひときわ鮮やかに尾根筋を染めているのはブナ林だ。ちかぢか登ってみようと思う。

田起しが終わり、水の入った田んぼにオシドリが姿を浮かべていた。カルガモはいつも見かけるのだが、オシドリは珍しい。数日前に土淵川で見かけたのと同じ個体にちがいない。写真に撮ろうと思い、散歩から家に戻って朝飯も食べずに、シバを置いてカメラを片手に自転車で現場に行くとオシドリの姿はすでになかった。

散歩中、山々や空のたたずまいに感動することがある。シャッターチャンスとでもいうのだろうか。ここでシャッターを切ったらいい写真になるかもしれないと素人ながら思ったりする。もちろん、そうしたからといって、思い通りの写真が撮れるとは限らない。しかし、それでもスケッチなどと同じように楽しそうである。

ということで、私はいつまで続くか予測もつかないけれども、気のむくまま、散歩にはカメラを持ち歩くことにした。そのほうが、より一層充実した散歩ができそうな気がしたからである。



秘境ヒマラヤ産「冬虫夏草」

本商品の売り上げ代金の一部は現地支援金に還元します。

本製品はヒマラヤに自生する正真正銘の冬虫夏草です。冬虫夏草は現地のチベット語でヤルツァゴンブと言います。直訳すれば夏草冬虫になります。ヒマラヤの奥地トルボ地方に自生し、現地の人達は適宜毎朝一本ミルクを飲みながら食べます。

3ヶ月程焼酎にひたして飲む人もいます。中国では料理にも使用します。

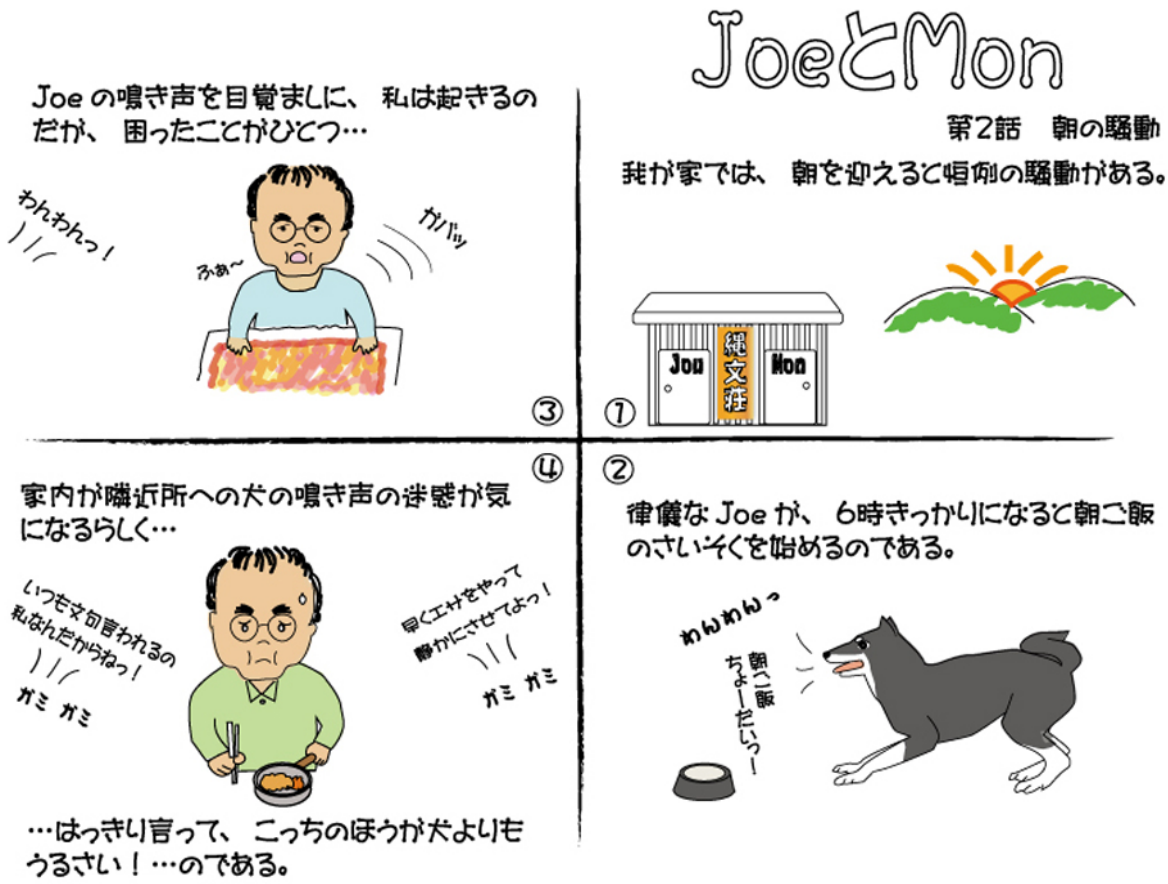
一般的には煎じて飲むのがいいでしょう。煎じたあとの冬虫夏草は食べます。

まとめて欲しい方はご相談に応じます。

委託販売：秋田県・八幡平玉川温泉売店

根深　誠

問合せ　：　0172-88-2949　〒036-8241　弘前市桜ケ丘1-9-12



JoeとMon　第2話　朝の騒動

作画:ぽよよ～んオヤジ ・ 文:風(フウ)

ワタシ達が住んでいる「縄文荘」マンションは、去年の夏にオトーサンが手作りで建ててくれました。冬越しも無事にできて一匹ずつの個室暮らしは快適です。

ところが、モンダイがひとつあるんです。

ワタシ・Ｊｏｅは、朝6時にきまって「ごはんのさいそくをする」の。これがどうもご近所の評判ではよくないんだって!!!困ったなあ!ワタシ、耳がいいのよ。ウチの人が外に出てくれれば戸が開く音ですぐわかるの。わかれば(もうすぐごはんだあ!)うれしくって、だまっちゃいられないのよっ!

ウチの家族の皆さん、ご近所の皆さん、朝寝坊のお邪魔をしちゃってごめんなさい!でも、お仕事や学校の遅刻はないでしょ?えへへ～、えへん!

「あ、Ｊｏｅがさいそくを始めた。お寝坊しないで今日も頑張ろう!」なんて、ワタシの声を目覚まし時計の代わりにしてくれないかなあ・・・。オトーサン・オカーサン、こんなことをお願いする　なんて、ワタシ、虫がよすぎるかしら???

問題はお休みの日。これはオトーサンにお願いするしかないわ。うちのオトーサンて、朝、暗いうちからパソコンするんだって。だったら、パソコン始める前にワタシにごはんちょうだい!早くごはんくれたらワタシ唸かないわ。おかげでご近所の皆さんは朝寝坊できるかも・・・。(早くごはんが出てくるのは歓迎よっ。前の晩にごはんの用意をしてくれてもいいじゃない?そんなのズルイ!なんて叱られるかな?)

（いつもマジメなＪｏｅより）

「こらっ、Ｊｏｅ!ズルイこというな!Ｍｏｎを見習え!ごはんが出るまで、おとなしくしてろ!」　（オトーサンより）

〔参考〕

柴犬は家族の生活習慣にすぐなじみ、順応できる能力があります。家族に愛されていればいるほどよくその能力を発揮します。ところが、それが今回のような場合にはかえってトラブルの原因になることもあるわけです。このようなことは、仔犬時からの習慣付けで、防ぐことができます。前記のような犬の能力を理解しその習慣化を予想して、ワンパターンの生活にならないように工夫してみることも必要ではないでしょうか？犬との知恵比べとでも考えて「犬との駆け引き」を楽しもうではありませんか？